

砂遊びに見る子どもの育ち

笠間 浩幸

はじめに

砂場では、乳幼児のさまざまな発育・発達の姿をみることができる。もちろん、子ども達は何らかの能力の獲得を目的として遊ぶのではなく、自由に楽しさを追求しているだけである。しかし、自発的な活動を通して、自然な発育・発達が期待できるのなら、それは理想的な子どもの育つ姿といえるであろう。

本来、遊びとは、このような働きをするものであり、かつては多様な遊び（特に自然や大勢の子ども達が群れるような遊び）のなかに、子どもの心身の成長が自然に織り込まれていたのである。

しかし、いわゆる「三間（時間・空間・仲間）の減少」という言葉に象徴されるように、子どもの遊び環境の変化（悪化）が進行するなかで、今、砂場のような身近な遊び場は、子どもの遊びを守る「最後の砦」ともいべき存在となりつつある。

そのためにも、砂遊びが子どもにとってどのような意味をもつ遊びであるかを明らかにすることは、遊び環境について真剣に考え、それを守る上でも重要な課題となる。また、砂遊びといった当たり前のような遊びにも、段階的な発展過程があることに気づくことは、保育や子育てにおける子どもとのかかわりや環境構成の仕方に大きな影響を与える。

本稿では、このような課題意識から、保育園における長期観察からみることできた砂遊びに潜む子どもの発達の要素と、乳幼児の成長に伴う砂

遊びの発展的展開についての仮説を述べ、考察する。

1. 砂遊びに潜む子どもの発達の要素

子どもは砂遊びの一瞬、一瞬において多様な能力を発揮し、技能を伸ばす。砂遊びには子どもの力を引き出すさまざまな要素が潜んでいる。それを模式的に表したのが図 1 である。10 項目の要素を概括すると次のようになる。

- ①感覚：子どもは色の違いや、すぐに形を変える砂に視覚的な関心を向け、思わず手を伸ばす。乾いた砂、湿った砂、泥状の砂、温度の違う砂などの違いを、手指や素足で触覚的に感じとる。
- ②情緒：砂は子どもの身体や動きをそのまま受け止める。ありのままの自分を受け入れてくれる砂場には安心感があり、活動的な遊びだけでなく、静かに過ごしたい時も、心地の良い居場所となる。
- ③身体運動：砂の上を歩いたり、走ったり、飛び跳ねたりするには、微妙なバランス感覚や筋力が求められる。深い穴を掘ったり、バケツの水を運んだりすると、子ども達の運動量は知らぬ間に増えていく。
- ④物の操作：砂を介した物の扱いでは、手指や手首、肩などの動き、力の入れ具合、抜き具合、ひねり具合などが重要になる。子どもは物の扱いを何度も繰り返す、次第にそれを道具として使いこなすようになる。
- ⑤言葉：砂場での子ども達の言葉は、遊びの深まりとともに増加する。それらは、子ども自身の

筆者：同志社女子大学現代社会学部

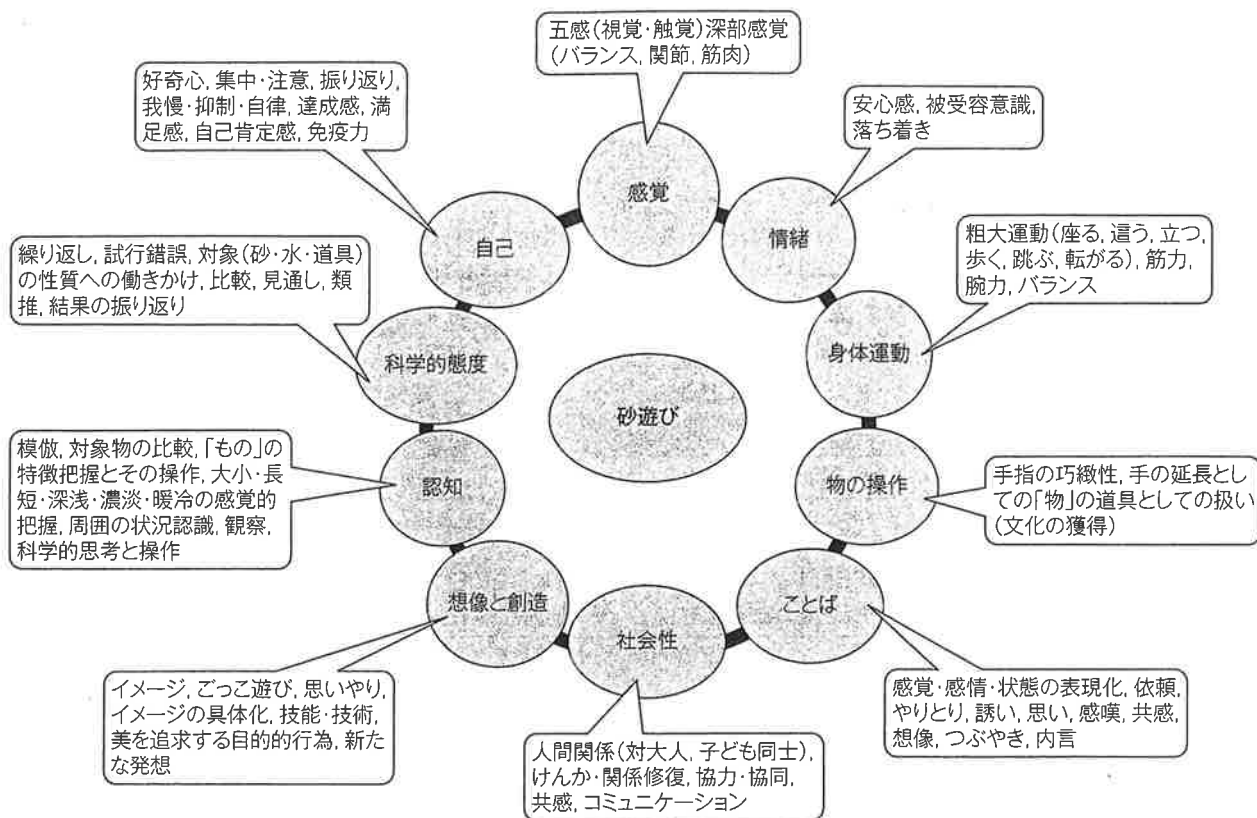


図 1 砂遊びに潜む子どもの発達の要素

経験をベースした具体的かつ意味深いものであり、自分の思いやイメージを語ることを通して、保育者や仲間とのコミュニケーションを広げていく。

- ⑥社会性：年少期であれば物の取り合いや砂をかけるなどのトラブルもみられる。一方、年長になるに従い、協同的な作業も広がる。遊びを通して、話し合いや協力、仲間との人間関係を深めていく。
- ⑦想像と創造：砂の固まりに小石や木の葉を飾って美味しそうなケーキができあがる。また、砂場全体が線路となり、山の合間を電車の模型が走る。砂場ではイメージが具体的な創造につながっていく。
- ⑧認知：砂遊びでは対象物の大小関係や軽重・長短、乾湿、堅さや柔らかさ、上下左右、角度や方向など、さまざまな物質の様態や自分の身体との関係性を理解し、それらを自分の言葉でも表現する。
- ⑨科学的態度：泥団子作りは、砂と水の絶妙な調合の工夫である。穴に水を入れたり、砂山が崩

れないようにトンネルを掘ったりというのは、全て自然の法則へのかかわりである。子ども達は試行錯誤を繰り返し、見通しや仮説をもって、それを実験的に確かめていく。

- ⑩自己：思い通りに何かができるとき、子ども達は最高の笑顔を見せる。失敗した時は、何度も挑戦を繰り返す。遊びが、忍耐や集中、自信や自己肯定を促し、自分を見る自分と見られる自分の存在に気づいていく。

以上、子ども達は、砂遊びから実にさまざまな能力や態度が自然に引き出されている。目の前の子どもが今、どのような発達の姿に向かっているのかを意識することで、子どもの砂遊びの姿は全く違ったものにみえてくるだろう。

2. 砂遊びの発展的展開

一般に子どもの砂遊びは、「砂遊び」としてひとくくりにされがちである。しかし、年齢によって、あるいは同じ年齢でも、例えば5月と12月の砂遊びとでは、子どもの興味や砂へのかかわり方、

表 1 砂遊びの発達の局面の展開

	フェイズ1	フェイズ2	フェイズ3
特徴	感覚的な出会いとしての砂遊び	砂で遊ばない砂遊び (砂に間接的に関わる砂遊び)	砂で遊ぶ砂遊び (砂に直接関わる砂遊び)
子どもの行為	見る, 触れる, 座る, 歩く, 登る…	物を持つ, すくう, 入れる, 砂型をつくる…	掘る, かき寄せる, 山をつくる, 水と混ぜる, 泥だんごをつくる…
発達の視点	・感覚 (特に視覚・触覚) ・深部感覚 (筋肉, 関節, バランス)	・手指の巧緻性 ・手首, 腕の回転, 姿勢の維持 ・物の道具としての扱い (文化の獲得)	・微妙な操作性の向上 ・手指の力, 腕力増大, 触覚の鋭敏化 ・認知, 科学的な態度と思考
	フェイズ4		フェイズ5
特徴	イメージと言葉が広げる砂遊び		アートとしての砂遊び
子どもの行為	砂を何かに見立てる, 見立てを通して友達とやりとりをする ごっこ遊び, 役割分担 砂場全体にイメージを広げていく…		砂を固める, 彫る・刻む, 模様や形をつくる 自分のイメージに沿い, 仲間とイメージを共有しながらの制作 制作物を評価し, 活動を振り返る
発達の視点	・想像力, 創造性 ・言葉 ・協同, 社会性, コミュニケーション		・目的の意識化 ・表現 ・美意識 ・共感

遊びのなかの人間関係は大きく違う。当然、砂遊びの環境構成や子どもへのかかわりは、それぞれの時期の特徴に沿ってなされるべきである。そのためには、砂遊びの長期的な視野による展開局面をとらえ、一定の見通しをもつことが大切になる。この局面を子どもの発達の課題とともに示したのが表1である。それぞれについて、簡単にみていきたい。

フェイズ1 感覚的な出会いとしての砂遊び

乳幼児にとっての砂遊びは、砂に触れる、もしくははみるといった触覚的・視覚的出会いから始まる。一般には砂の感触の良さが砂遊びの楽しさを引き出すと思われがちだが、初めて砂が足の裏や手に付いたとき嫌がる子どもは少なくない。そんなとき保育者は、砂をさらさらとこぼして見せたり、砂の型抜きを子どもに見せたりする。砂の状態が目の前で変化するのを見て、子どもは砂そのものに関心を寄せ、自分から砂に触ろうとする。

砂場では、乳児でも砂の上に比較的長い時間座っていたり、はいはいをする。やがて立ちあがり、砂を踏みしめて歩いたり、1歳数カ月になると自分の背丈ほどの砂山に登ったりする。これは深部感覚としての関節や筋肉、バランスを総動員

する動きであり、砂場で子どもは、さまざまな感覚を用いて砂との関わりを深め、身体と砂との関係性を作り上げていく。

フェイズ2 砂で遊ばない砂遊び

子どもが砂の上にお座りしたり、立ち歩くようになった時、ほとんどの場合、両手もしくは片手に物を持つ。最初は、手が直接砂に触れることよりも、手に持った物をこね回したり、振り回したり、物同士を打ち当てたりする。その後、ようやく物で砂を掘ったり、砂を容器に入れたりする。このような、物への関心が主となり、物の操作のための砂の扱いといった遊びの段階を「砂で遊ばない砂遊び」と特徴づけられる。

実際に、物が何もない砂場の中に1歳5カ月から1歳7カ月までの幼児5名を入れるという実験をしたところ、砂遊びは成立しなかった。10分後、そこにいつもの物を持ち込むと、子ども達はすぐさま自分の好きな物を選び、黙々と砂遊びを行った。

このような、砂で遊ばない砂遊びを通して、子ども達は物の持ち方や扱いを上達させる。手指や手首、腕、肩、手と目の協応、バランスを取りながらの物の操作など、物に応じたあらゆる動きを

着実に身につけていく。それは、物の道具としての扱いであり、文化の獲得でもある。

フェイズ3 砂で遊ばない砂遊び

次は、フェイズ2とは対照的に「砂で遊ぶ砂遊び」である。つまり、子どもの身体が直接砂に触れることが増え、子どもは砂の状態や形状に関心を持ち、自分の手で砂の変化を引き起こす。

泥団子作りはその典型といえる。子どもはまず、砂と水のほどよい調合を図って、核となる砂の固まりを作る。それを両手のひらで転がして丸めながら、乾いた砂をかけたりして徐々に湿り気をなくす。力が入りすぎれば団子は壊れるが、ある程度の力を入れなければ砂は固まらない。その姿は、砂の状態変化を作り出す科学者のようであり、ていねいな技を発揮する職人のようでもある。

より高い砂山作りや、砂が崩れないようなトンネル掘りなども、砂と直接に関わる行為である。

このような砂で遊ぶ砂遊びの出現は、手や腕の力の増加、手指の巧緻性の向上、砂の感触をより敏感に感じ取る感覚の鋭敏化、そして、砂という素材の持つ、自然・物理的な法則性への経験的な気づきがあると考えられる。

フェイズ4 イメージと言葉が広げる砂遊び

子ども達は、砂遊びを通して「ごっこ」の世界を広げ、それをさまざまな言葉を用いて表現する。

ある日、子ども達と保育者が砂場の真ん中に砂山を積んでいた。保育者が「何味のシロップがいいですか」と尋ねると、「イチゴ」「メロン」と返す。高く積まれた砂は、「かき氷お山」であった。また別の日には、砂山にフープとスコップが組み合わされ、そこに子どもが座って何やら唱えている。それは「変身トイレ」なるもので、そこに入って用を足すと何でも好きなものに変身できるという設定だった。

生活の広がりと言葉の獲得とともに、子ども達はいろいろなイメージを膨らませ、砂を使って自分の思いを形に表す。また、その思いは言葉によって他の子ども達にも伝わり、砂を介した共感と人間関係を広げていく。

フェイズ5 アートとしての砂遊び

筆者は、年長の子ども達に、左官職人が使う木ゴテや金ゴテ、それに底を抜いた大きなバケツを紹介してみた。木ゴテはシャベルのように砂を掘り、砂を集めては簡単に押し固め、しかも肌理細かく砂の表面をなでつけることができる。金ゴテは、砂を包丁のように切ることができ、垂直のきれいな辺や角、断崖、階段などができる。また、底が抜けたバケツは、ひっくり返して砂と水を入れて押し固めることで、特大の砂型を作ることができる。

年長の子ども達は、すでに、物を扱う身体の動きは磨かれており、その能力を応用して自分のイメージに近づくよう新しい道具を使いながら、砂の造形に挑戦する。作ったものを自分達で評価したり、修正を加えてみたり、最後は互いに完成の喜びを共有する。アートとしての砂遊びである。

小学校への入学を数日後に控えたある日、砂場一杯に子ども達が作り出した「エルマーのぼうけん」をみた。窓やドアが掘られた大きな砂の家々、水が流れる川や橋、灯台や砂漠などが砂場に広がる。そして、自分たちの作品を園長先生に誇らしげに紹介する子ども達がいた。

砂場に現れた作品、それは子ども達の思いや願い、物語世界への没入、物・道具操作の上達、友達や保育者とのかかわりや共感など、保育園時代のあらゆる成長が息づく集大成であった。

おわりに

砂遊びという、ごく普通の遊びにも、子ども達の発育発達の可能性は、たくさん詰まっている。遊びが身近であればあるほど、子どもにとっては、日常的にその可能性を享受することが可能となる。しかも、それが子どもの楽しみと喜びを増大させるものであるなら、これ以上の効果的な保育・教育・子育て環境はない。今、改めてこのような身近な遊びに目を向け、その必要性と重要性を理解し、子どもの遊びを保障することが求められる。本稿がその一助となることを願うものである。